

先生がさう聞いた。二日行かないで居ると、きつと菊枝さんを見に寄した。入院以來、先生が山科君だけを迹にも先にもたつた一人の友達にして生きて居る事は山科君も好く知つて居る。何を置いても病院を缺勤する事だけは山科君には出来なくなつて了つた。

實は、先生が京都へ來るとなつた時に、山科君は考へた。先生が入院する以上は、どうせ毎日のやうに訪ねないわけには行かない。毎日行つて居れば、いつかは病氣がうつるに極つて居る。萬一うつらずに済んだら、それは餘程の僥倖で、まづ十のものが九つまではうつるものと思つて居なくてはならない。それで、何にしても極めるなら今きつぱり極めて置かなくては駄目である。つまり、思ひ切つて不人情な人間になつて、斷然先生と離れて了ふか、それとも、うつる覺悟を極めて毎日病院へ行くか、どつちかである。しかし、生來極めて意氣地なく出來て居る山科君に、斷然病院へ行かないなんと言ふ思ひ切つた藝當の出來よう筈がない。そこで、その時山科君はうつる覺悟を極めて了つた。

萬一うつらずに済めば、それは全く大きな拾ひ物である。もし又うつつても、直ぐ手當さへすれば、或は癒らないとも限らないかも知れない。とにかく、まあ出来るだけ用心して

毎日行くことにするより外に途が無いと、實は泣き面をしながらその時決心した。

所が、さていよいよ病院通ひが始つて見ると、その氣味の悪い事と言ふものは實に想ひの外である。幾ら覺悟を極めて居ると言つたつて、もともと已むを得ず厭や厭や極めた覺悟なので、やつぱり怖ろしくて怖ろしくて溜まらない。寢ても起きてても、山科君は毎日その事ばかり考へて居る。

先生が入院してまだ間の無い時、例の人の好い前の病舎の醫者が、一日そつと山科君を呼んで注意した。先生の痰には随分結核菌が混つて出る。だから、傍へ近づく者も餘程注意をしなくては危険である。第一、咳を正面から浴びないやうに氣をつけて、話しをする時にもなる可く横から話しかけるやうにしると言ふのである。

所が、生憎毎日山科君の掛ける椅子は先生の足の所にある。厭やでも先生と眞つ正面に向き合はないわけには行かないのである。先生が激しく咳き込めば、唾は遠慮なく顔の眞中へ飛んで來る。そのたんびに山科君は心の底から震へて居る。と言つて、その椅子を横へ動かす程の勇氣は山科君には無い。

元來、山科君は非常に喉が弱い。冬になると、大抵いつでも多少は扁桃尖が腫れて居て、随つて、非常に好く風を引く。寧ろ、冬中絶えず多少は風を引いて居ない時は無いと言つた方が好い位である。さう言ふ少し風心地の時に、少少熱の有るのを押して病院へ出かけて行く氣持と言ふものは、實に何とも言ひやうの無い厭やな氣持である。ああ、ああ、やつぱり俺はうつるのかなあ、これでうつらないわけが無いなあと思つて、今にも間もなく死んで了ふやうな心細くて溜まらない氣持がするのである。

ある時、友人の一人が山科君に注意した。何でも、前の晩好く寝られなかつた時なんぞが一番危険なのださうだから、さう言ふ時に好く氣をつけるが好いと、さう言つた。さう聞いて以來、山科君はまた一つ苦勞が殖えて了つた。ゆうべどうも好く寝られなかつたが、好いかしら。斯う言ふ時が一番あぶないと言つたなあ、一人で神経を尖らして居た。

すると又ある醫學士の友人が有つて、その人はまた山科君に斯う言つた。何でも、ああ言ふ病氣に近づくには、うつりはしまいかうつりはしまいかと絶えず氣にして居るのが一番いけない。さうしていつもびくびくして居るのは、つまりもう已に病氣に負けて居ると言ふこ

とだ。つまりそれだけでもう微菌に對する抵抗力が弱つて居るわけだ。大抵はさう言ふ所をつけ込まれてやられる。だから、何より大切なことは、いつでも平氣な氣持で居ることだ。なに、俺に病氣がうつるものかと言ふ氣になつて居るのが第一だ。

山科君はなる程と大いに感心した。なる程さうに違ひない。俺はこれまでうつりはしまいかうつりはしまいかと、そればかり氣にして居たが、あれが何よりいけなかつたのだな。知らないものだから、つまらない事をして損をした。よし。これからは決してびくびくしやしないぞ。

「なに。俺は肺病なんぞうつりはしない。」

それから毎日、病院の門を潜る時に、必ず一度つつ下腹にぐつと力を入れて、頭の中で斯う思ふことに極めて居た。つい忘れて迹から思ひ出すと、ああ、了つた了つたと思つて、あわてて俄かにやり更へた。

殊に、突然先生が激しく咳き込んで、遠慮なく飛ばつちりが顔のあたりへ飛んで來る時なんぞには、まさかに顔を反ける事も出來ないので、唯だ凝つと觀念の眼を閉ぢて、

「なに。俺はうつりはしない。うつるものか。」  
丸でお呪ひのやうに唯だ一心に唱へて居た。  
とうとう了ひに山科君はひどい神経衰弱にかかつて了つた。

その中また一人の友人がやつて来て、ケレオソオトと言ふ肺病の豫防薬が有るさうだから使つたら好からうと教へて呉れた。

山科君は非常に喜んだ。さうか。そんなものが有つたのか。さうと知つたら、もつと早く呑むのだつた。惜しいことをした。しかし、今からでもまだ遅くはない。善は急げだと思つて、直ぐ賣藥屋へ買ひに行つた。見ると、色の附いた瓶に一杯つまつた大粒の丸薬である。山科君は特大の分を買つて、恭恭敬敬両手で捧けて歸つて来た。

何でも前に一度聞いた事が有るが、元來賣藥なんと言ふものは、内務省の根本の方針が無害無毒と言ふのださうで、随つて利くものはほんの少ししか遣入つて居ない。だから、定量よりはぐつと餘分に呑まなければ利かないものださうだ。そこで、山科君は、藥瓶には一度

に三粒づつ一日三回とあるのを、初めから五粒づつ、やがて七粒づつに増して見たが、それでもまだ足らずに、とうとう了ひに十粒づつに殖やして了つて、その上、何でもどつさり呑め呑めと思つて、三度の食後の外に、夜寝る前にやはり十粒づつ、つまり一日に四十粒づつ呑むわけである。十粒と言ふと凡そ手の平一杯あるのを、口一杯に頬ばつて、もごもご喉へ詰まつて呑みにくいのを、水と一緒に眼を据えて無理やりぐつと呑み込んだ。

さう言ふ具合にして、三百個入りの特大の瓶が瞬く中に空になつて了つて、山科君の机の上には日一日とケレオソオトの空瓶が殖えて行つて、とうとう長蛇の列を作るに至つた。

此の薬は怖ろしく匂ひの高い薬で、暫くする中に山科君のからだは固より、衣類から帽子から、身につける程のものには一つ残らず其の匂ひが移つて了つて、了ひには便所のなかまですでに消毒した迹かなんどのやうにケレオソオトの匂ひがぶんぶん匂つて居る。

「おい。これは一體何の匂ひだい。」

友人なんぞが訪ねて来て、部屋へ這入るなり直ぐに眉を蹙めたが、どうして山科君はなかなか其の位のことへこたれはしない。日頃のすべらな無性ものに似合はず、これだけは

驚く可き熱心で吞み續けて、唯の一度も缺かさなかつた。とうとう了ひに山科君は眼の中まですつかり色が變つて了つた。

「ケレオソオトか。さうさな。まあ言はば氣休めと言ふだけの事さ。」

一日、山科君がケレオソオトは實際利くだらうかと聞いたのに答へて、前の醫學士の友人が澄ましてさう言つた。

山科君は忙然として、一體俺は長い間何をして居たのだらうと頻りに考へ込んで居た。

## 四十。

山科君の病院通ひはいつか一種の習慣になつて了つた。しかし、病院通ひに伴ふ不快な氣持はいつまで立つても少しも減じない。いや。減じない所でない。寧ろますます甚しくなる一方である。唯だ變な行きがかりから已むを得ず厭や厭や毎日通つて居るだけの事である。實を言ふと、山科君自身も自分で自分を疑ひ出した。

山科君は無論先生を氣の毒だとは思つて居る。知らぬ異國の知らぬ人ばかりの中で死にかけて、世には氣の毒な人も有るものだと思つて居る。しかし、どうもそれはそれほど切實な氣持では無いのである。人が氣の毒だと言へば、いかにも氣の毒だなあと思ふ位の程度に過ぎないのである。

それに、先生の方では實際心の底から山科君のことを思つて呉れて居る。今は山科君より外に誰もたよる人が無くなつて特別では有るけれども、しかし、これまででも殆ど言ひ様の無いほど面倒を見て呉れた。實際山科君は今までにこれほど人から深切にして貰つた覚えは無い。それは正に感激に値する所だと思つて居る。所が、實際は、一向感激なんぞしはしない。唯だ好い先生だなあと思つて、ほんのちよつと有り難がつて居るだけである。その證據には、斯うやつて毎日病院へ通つて來ながら、ついで一度心から先生の事を思つて來たなどと言ふ事は無い。どうかして此の病院通ひをするに及ばなくなつたらさぞ好からうと思はぬ日としては唯だの一日も無いのである。どうも先生の言ふ例の愛なんと言ふ心持は山科君にはやはり縁が無いらしい。つまるところやはりこれも先生の言ふ「日本人」なのだらうが、それ

もどうも餘程下の方に違ひない。考へて見ると、何だか少し情ない氣持がする。そして、自分がいかにも恩義を知らぬ不道德な人間のやうな氣持がして、何かにつけて軽くは有るが、いつも心の底で咎めて居る。出来ることなら、山科君もやはり斯う言ふ氣持にはなり度くない。同じ病院通ひをする位なら、やはり何かの満足の氣持を抱いて通ひ度いものだ、了ひにひどく勘定高い事を考へ出した。

さう言ふ山科君の心持は病院へ行つたんにいつもつつ突かれる。なぜかと言ふと、病院には菊枝さんが居るからである。

菊枝さんは實際よく先生の世話をする。傍で見て居ても實際感嘆するほど心から先生の爲に働いて居る。あんな人の嫌ふ病氣の世話をよくああして厭やな顔一つしないで出来るものだ、山科君はいつも寧ろ不思議に思つて居る。

あんな色艶の悪いか細いからだをして、見て居ると今にもうつりさうな氣持がするが、それが當の菊枝さんはそんな氣ぶりは毛ほども無くて、澄まして夜は先生の寢臺の下へ這入つて寝る。さう言ふ平氣な様子を見ると、何だか不思議で溜まらぬ氣もするが、同時に山科君

はそのたんびにいつも病氣がうつりはしまいかと思つてそればかり氣にして居る自分の氣持が心の底から恥しくなる。あれは無教育で無神經だから、それであんなに平氣で居られるのだと、ときどき山科君は自分への申しわけのやうに考へて見る事も有るが、併しどうもさうとも思へない。

とにかく、どう考へて見た所で、山科君とは到底比較にならぬくらゐ菊枝さんは先生に對して深切である。何しろ此の俺よりもあの博打うちで喧嘩つ買ひの菊枝さんの方が遙かに人に深切で遙かに道德的なのだから世の中は不思議なものだと思つて、山科君はときどきすつかり悲觀して了ふことも有る。

所が、それがどうも不思議である。それほど深切に菊枝さんが世話を焼いて居るにも係はらず、先生は少しもそれを有り難がつて居る模様は無い。なるほど二人はよく喧嘩をする。

「先生。あんたも随分と變人だつせ。そないなこと日本で通用しやしまへんで。」  
何かと言ふと、菊枝さんは直ぐ遠慮なくやつつける。しかし、喧嘩はしても、先生の世話

だけは實に感心に驚くほど好く氣をつける。  
所が、先生の方はさうで無い。菊枝さんが居なくなると、直ぐ口を極めて悪しざまに罵倒する。

「あんなひどい嘘つきを私はまだ知りません。殆どあれは病氣的で有りますな。私はあれほど低腦的な人を見たことが有りません。」

山科君は何だかわけが分からぬ。毎度のことでは有るけれども、どうも實にをかした人達が有るものだと思つて居る。

四十一。

すつかり押し詰つて了つて、何と無く世の中が騒騒しくなつて來た。大地は底から冷え返つて、毎日粉のやうな細かい雪がちらついて居る。

そこへ例の怖ろしい流感と言ふやつがはやつて來た。毎日毎日夥しい數の人間が死んで、

しかも其の死骸を焼く手が足りないで、焼場の前には何日か前からの棺が丸で山のやうに積んであるなどと言ふ噂が極度に人の心を脅かした。何だか丸で戦争か何ぞのやうに變にあわただしい氣持である。

生來喉の弱い山科君は早速第一番にやられて了つた。幾日か熱を出してうんうん唸つて居た。その間、菊枝さんが幾度も病院から見舞ひに來た。

「先生はそらあんたを待つてはりませ。いつ頃になつたら來られさうやちうて、日に何遍も聞かはるのだんがな。そら先生かて淋しうおまんのやろ。ほかには丸きり誰も來はらしまへんのやさかいな。」

すると、突然菊枝さんは聲を低くして、

「それがなあ。ゆんべも復た先生泣かはるのだんがな。もう左の方の肺もやられてまんのやてなあ。わしはもう迎もあかん。左へ來たらもう到底駄目や。此のまま死んだら、わしほど詰まらん人間は世界中に有らへん。丸でこの世へ苦しみに出て來たやうなものやちうてな。おいおい聲を出して泣かはるのだつしやろ。わたいもほんまに氣の毒でなあ。」

しかし、山科君がやつと快くなつて、久し振りに病院へ訪ねて行つた時には、先生はやはり機嫌の好い顔をして居た。

「もうすつかり宜しくなれましたか。随分久しくお目にかかりませんでしたなあ。」

「ヴァイオリンを出してある。」

「山科はん。先生たらな。ほんまに怪つ體な先生だつせ。今葬式の音楽をやつてはつた所だんがな。私が死んだら、斯う言ふのをやつて呉れちうてな。」

先生もにやにや笑つて居る。

「どうも私はあの佛教の葬式と言ふのを好みませんな。どうもあれは嘘と言ふ氣持が致しますな。こないだお母さんがこれを讀めと言つて『阿彌陀經』を持つて來て呉れたので有りませんが、私は非常に驚きましたな。私は無論初めて讀んだので有りませうけれども、幾ら何でもお經で有るからには少しは高尚的な道理と言ふやうなものが有るかと思つて居りま

した。そしたら、丸で違ひました。あれは唯だ極樂のことばかりで有りませうな。極樂へ行くと、斯う言ふ好い事が有る。斯う言ふ美しい花が咲いて居る。斯う言ふ立派な鳥も居る。了ひまで丸きりそんな事ばかりで有りませうな。私はよく唯今の人間があ言ふもので満足して居る事が出来るものだと思つて非常に驚きました。」

「そらさうや。わたいかて佛は大嫌ひや。生得、坊主は虫が好かん。中でもお母んとこの糞坊主が一番嫌ひや。あの生白い顔を見ただけでもうわたいは胸が悪うなる。」

菊枝さんはまた糞坊主を持ち出した。

四十二。

暮れから降り續けた大雪がからりと晴れた。元日は好い天氣である。不潔なものがすつかり雪に埋まつて了つて、今日だけは病院も珍しく美しい。雪の上に朝日がまぶしく照り返して居る。

「新年は大變におめでたうござりまする。」

寢臺の上から先生が頗る變な挨拶をした。見ると、綺麗に髭を剃つて居る。

かんかん火の燃えて居る煖爐の傍の窓の上に重ね餅とほんの形ばかりの小さな注連繩しるしとが載つて居る。随分珍な圖だと思つて山科君は不思議さうに見廻して居る。

「山科はん。今年はわたいの年だつせ。へえ。猿。喧ましい筈だんな。」

菊枝さんも追に今日は着物を替へて、何だかびかびかしたものを重ねて居るが、その上へやつぱりいつものうそ穢ないエプロンを掛けて居るから何にもなりはしない。

「山科はん。ゲエリヤから手紙が來ました。」

先生は手紙を出して前に置いた。

「ゲエリヤの夫が死んだと言ふのですな。」

山科君は思はず愕然として眼を睜つた。ゲエリヤの夫は用事で浦鹽へ來て居る中に、突然突發した革命騒動の流れ玉が頭に中つて、不意に死んで了つたのださうである。しかも、ゲエリヤは今三人目の子供をおなかの中に持つて居る。

二人は長い間唯だ凝つと向き合つて黙つて居た。何だか、元日も、好く晴れた日光も、一度にどこかへ消えて了つたやうな氣持がする。

「此の手紙は殆どゲエリヤと同じ位に私をも悲しがらせました。その爲に今私がどれほど悲しんで居るか、到底普通の日本人には分からないで有りませう。私には本當の「心」の友達と言ふものはたつた二人しか無いので有ります。其の一人がゲエリヤで、ほかの一人があなたで有ります。」

山科君はすつかり面食つて了つた。何だか變にむすつ痒い氣がして、思はず冷汗が流れて來た。どうも先生はどきどき變なことを言ひ出すので、反つてこつちが困つて了ふ。あれは多分露西亞語で考へたことを日本語に翻譯して言ふものだからして、こんな妙な、到底日本人なんぞの言ひさうも無い變てこな事になつて了ふのに違ひない。何しろ相手が返事に困つて了ふぢや無いかと思つて、山科君はすつかり極まりを悪がつて居た。

「私ももし暖くなるまで此の儘で居ることが出來ましたら、ゲエリヤの所へ行かうと思つて居ります。ゲエリヤも私が参りまじたら、幾らか悲しみを消すことが出来るで有りませ



う。」

窓にますます明るい日が差して、ときどき松の枝から雪の落ちる音が聞こえて来る。

四十三。

先生の部屋の真向ひの病室へ、今度新しく變な病人が入院した。入口の名札には「トブシン」と片假名で書いてある。やはり露西亞人ですかと先生に聞いて見たら、

「いえ。露西亞人では有りません。蒙古人で有ります。何でせう。蒙古の王さまが今この病院に入院して居るのでせう。それと一緒に來たのでせう。」

なる程、さう聞くとそんな事を新聞で見たやうな氣持がする。それでは多分蒙古の貴族か何かなのだらうと山科君は思つて居た。

所が、一日その病室の窓から、支那服らしい着物を着た若い女の姿がちらりと見えた。おや、女だつたのかと思つて、山科君は少し意外な氣持がした。それは、何だか變にどす黒い

顔をした、妙に肌に艶の無い、をかきな女で有つた。

それから山科君は病室やら庭やらでときどきトブシンの姿を見かけた。殊に、先生の部屋に居ると、好くトブシンが大きな聲で歌つて居るのが聞こえて来る。

「あれは一體何の唄で有りますか。何か日本の唄に相違ないので有りますが、毎日あればかり歌つて居ります。きつと近頃だれかに教つたので有りませう。」

日本の唄とは知らなかつた。變な調子だから、山科君は蒙古の唄だとばかり思つて居た。

なるほど、さう思つてよく聞いて見ると、何だか山科君も耳に覚えが有りさうである。文句を歌つて居るのでは無くて、

「らあらら。ららららら。」

と節ばかり歌つて居るのである。好く聞いて見たら、それは「梅ヶ枝の手水鉢」で有つた。變な古くさい唄を覺えたものである。それも餘程氣に入つたものと見えて、何度も何度も繰り返して歌つて居る。

「どうも煩さくて溜まりません。」

先生は顔を撃めて首を振つて居る。なるほど突拍子も無い大きな聲である。

一日、山科君が行つて見ると、先生の部屋へトブシンが来て居る。二人は頻りに話して居るが、山科君には唯の一言も分からない。迹で分かつたが、それが蒙古語で有つた。

山科君が這入つて行つたのを見て、トブシンも笑つてお時儀をした。頗る變てこなお時儀である。これも迹で聞いたので有るが、蒙古ではお時儀をしないのださうである。それでもやはり若い女で、笑ふとひどく無邪氣な顔になる。

「珍しいお客さまですね。」

迹で先生にさう言つたら、先生も笑つて、

「ときどきやつて参りますな。あなたの事も聞いて居りました。あれはあなたの弟かと言ひますから、いや、弟では無いと言ひますと、それでは何だ、あなたの家來か。いや、家來でも無い、友人だと言ひますと、さうか、友人があんなにたびたび見舞ひに来るのか、それではあの人は餘程好い人に違ひない、友人はそんなに深切で無いものだと言つて、頻りに感心いたして居りました。」

その翌日、山科君はトブシンが病院の庭を散歩して居るのに出喰はした。

トブシンは、にこにこして傍へ寄つて來た。そして、何とか話しかけたが、山科君には丸きり一言も分からない。思はず面食つて、へどもどして居ると、今度は、頗る變な露西亞語で、

「今日は。」

と言つた。山科君も同じくらる變な露西亞語で、

「今日は。」

と返事をした。

「あなたは蒙古語は知らないのか。」

「いや。蒙古語は知らない。」

「さうか。私はあなたは毎日クニャアジ福井の所へ來るからやはり蒙古語を知つて居るのかと思つて居た。」

「クニャアジ」と言ふのは殿さまとか侯爵とか言ふ言葉で有るから、「クニャアジ福井」

と言ふのは顔をかしなわけである。

「あなたはそんなにクニヤアジ福井が好きか。」

トブシンはにこにこ笑つて居る。山科君も何だか少し面白くなつた。

「その通りだ。私はクニヤアジ福井が非常に好きだ。」

すると、トブシンは非常にまじめな顔をして、

「クニヤアジ福井は非常に偉い人である。」

さう言つて、両手を高く上へ差し上げた。山科君は何だか少し驚いた。

「あの人は何でも蒙古のことを知つて居る。私達でもあの人ほどには知つて居ない。」

何とかは蒙古の秘密で、誰にも知らしはしないのに、それにあの人はそれも知つて居る。私は非常に愕いた。何でもそんな話しをして居る中に、こんぐらがつて了つて、さつぱり何

だか分からなくなつた。山科君は面倒くさくなつて、

「あなたは一體どこが悪くて入院したのか。」

と聞いて見た。すると、トブシンはちよつと考へて居たが、胸に指を當てて頻りに首を振

つて居る。多分單語を知らないのだらうと思つて、

「肺か。」

と言つたら、強く首を振つて、

「いや。肺では無い。」

「それでは何だ。肋膜か。」

「いや。肋膜でも無い。もつと上皮の所が悪い。」

山科君は變な顔をして、

「もつと上皮と言ふのはをかしいな。その上は骨か皮かぢや無いか。」

「その皮が悪い。」

と言つたので、山科君は思はず噴き出した。迹で好く聞いて見たら、やつぱり肋膜が悪いので有つた。

それから山科君はときどき庭でトブシンに逢つて、好く斯んな變てこな話しをした。そし

て、それもやはり病院通ひの責めてもの慰めで有つた。

「山科はん。あんたの友達はああ見えててなかなか色女だつせ。」

一日山科君が例の通り庭でトブシンと話して居るのを遠くの方から眺めてにやにや笑つて居た菊枝さんが、迹で籤から棒に言ひ出した。

「夜、寝てからな。王さまのお附きがそろつと忍んで来よりまつせ。わたい何度も見つけてやつた。靴を脱いでな。廊下を足袋はだしで抜き足さし足来よりまつせ。御苦勞なこつちや。何ほ戀路かて、寒あつしやろかいな。それがな。まだ面白あつせ。その男がなあ。一人やおまへんで。ときどき變つてまんのやがな。」

一日、例の豚小舎の所で、またトブシンに出喰はした。トブシンは山羊を相手にしいしい何か唄のやうなものを歌つて居る。どうやら今日のは「梅ヶ枝の手水鉢」では無ささうである。

「それは蒙古の唄か。」

「いや。これは支那の唄だ。蒙古の唄を教へて上げようか。」

山科君もこれは大いに面白いと思つた。蒙古の唄なんと言ふものは滅多に聞けるもので無い。

「うん。どうか教へてくれ。」

すると、トブシンは様子を直して、突然滅法界も無い大きな聲で歌ひ出した。どこか向うの病室の窓を明けて、變な顔をして見て居る人がある。山科君は大いに恐縮した。しかし、トブシンは一向平氣なもので、變なだみ聲を張り上げて一所懸命歌つて居る。

「どうだ。」

やつと歌つて了ふと、さう聞いた。

「それは何の唄だ。」

「これは門で人を待つて居る時の唄だ。」

「人とは何だ。戀人か。」

「戀人には限らない。主人のことも有れば戀人のことも有る。」

是非これを覚えろと言つて、また大きな聲で歌ひ出した。向うでまたがら窓を明ける

音がする。山科君は思はず首を縮めて居る。

「もう好い。もう好い。もう分かった。」

「さうか。もう覺えたか。それは好い。では、一つやつて見ろ。」

「やらなくても好い。もう分かった。」

しかし、幾ら言つてもトブシンはやつて見ろと言つて承知しないので、とうとう山科君も弱つて、小さな聲で

「いいぜんぶう。いいわんぶう。いいいぜ、いいわん、まあにいほう………」

と初めの所をやりかけると、

「いや。そんな小さな聲では駄目だ。もつと大きな聲でやれ。これは出来るだけ大きな聲でやる唄だ。」

と言つて叱られた。

トブシンは好くこの小舎の傍に居た。二人はいつも山羊のみいみい啼くのを聞きながら話しをした。

「君は蒙古へ歸りたくは無いか。」

「いや。歸りたくない。蒙古は日本ほど好くない。」

そしては頻りにもつと唄を教へてやらうと言つた。山科君は唄はもう懲り懲りして居るので、もう好いと言つたけれども、どうしても聞かないで、また歌ひ出した。しかし、今度は割合小さな聲なので、山科君もやつと安心した。今度のは怖ろしく長い唄である。

「長いな。それは一體何の唄だ。」

「これは若い娘の唄だ。非常に哀れな唄だ。」

と言つて、ながながと説明し始めた。どうも好く分からなかつたが、何でも何とかと言ふ河が有つて、その河のこつち側の何とかと言ふ村から向う側の何とかと言ふ村へ若い娘が行つて居た。そしたら、そこで男が出来た。男と別れてこつち側の自分の村へ歸つたら、お腹なかに子供が出来て居た。また向うの村へ行きたいけれども、河が有るからなかなか行けない。男に逢ひたい、向う側の何とかの村が戀しいと言ふやうな事で有るらしい。これは大いに面白と思つて、

「その河は大きいのか。橋は無いのか。」  
と聞いたら、

「私も好く知らない。しかし蒙古の河には橋は無い。」  
と言つた。

それから先生の所へ行つて、

「今トブシンに蒙古の唄を習つて來ました。」  
と言つたら、先生も笑つて、

「さうですか。トブシンは先程もここへ來て居りました。大變あなたの事をほめて居りました。あれは好い人だ。あんな好い人は無いと言つて、頻りに感心して居りました。」

「山科はん。えらい事だつせ。あんた、トブシンはんに思ひつかれましたで。どうおしや  
す。一緒に蒙古へ行かはりまつか。」

菊枝さんが例の調子で傍からはやし立てて居る。

「ああ言ふやつは實に單純的で有りますからな。一度何か感じたら、決してもう疑ふと言

ふことが有りませんからな。」

先生が今度は少しまじめな顔をして蒙古の話しをし始めた。

「しかし、一度ああ言ふ所へ行つて参りますと、大變ためになります。世の中と言ふやうなものが實に詰まらんものと言ふことが分かつて、金だとか名譽だとか言ふ極く小さな事が少しも心にかからなくなりませぬ。何日も何日も駱駝の背に乗つて沙漠の中を行くので有りませんが、樹だの山だのと言ふものは丸で見えませぬ。唯だ砂山のうねうねしたのと空の雲が見えるだけで有ります。一度ああ言ふ旅行をやつて参りますと、何だか丸きり考へ方が違つて了ひませぬ。世の中の見方と言ふやうなものが變つて参りませぬ。行く時駱駝の背から、明いた鐘詰の鐘を投げて置きますでせう。一年立つて歸りにそこを通りますと、ちやんと同じ所に有ります。非常に妙な感じが致します。それに、蒙古のやつ等は決して物を拾ふと言ふ事をしないのですな。」

それから一月ほどして、トブシンは好くなつて退院した。

ある日、偶然街でひよつこりトブシンに出喰はした。トブシンは例の通りにここへ寄つて来た。

「あなたは私が國へ歸るのを知つて居るか。」

ひどく親しい口調で、丸で知らないのが不思議なやうにさう聞いた。山科君は少しをかしかった。

「私はこれから北京へ行つて、暫くそこに居て、それから蒙古へ歸る。」

「さうか。もうからだは好くなつたか。」

「もうすつかり好くなつた。日本の病院は非常に好い。私は日本が非常に好きだ。」

「それでは左様なら。御機嫌よろしう。」

と言つたら、トブシンも、

「左様なら。御機嫌よろしう。」

と言つて、人ごみの中へ消えて了つた。

四十四。

トブシンの迹へは直ぐ代りの患者が来た。これもやはり肺か肋膜炎かどつちかの、見るからに色の悪いどこかの奥さんで有るが、相當身分の好い人と見えて、自分の看護婦を備つて連れて来た。毎日行つて居る中に、山科君はいつかやはり其の看護婦とも目禮を交はす程の間になつた。

「私もどうかしてああ言ふ自分の看護婦を備ひたいと言ふ氣持が致しますな。看護婦は附き添ひと較べますと費用が何倍か上で有りますから、今の私には到底駄目で有りますけれども、さうしますと、注射でも何でも一一病院の看護婦を呼ぶ必要が無くなりますし、どれだけ愉快だかと思ひます。」

一日、菊枝さんの留守の間に先生がさう言つた。

丁度その時、例の『蒙古語文典』がとうとう本になつて出来て来た。すると、先生は非常

に喜んだ。

「山科さん。私は今實に喜んで居ります。殆どこれ以上の喜び的は有りません。これ、とにかく私が死にましても私の爲事が世の中へ残るので有ります。これで、私が生きて居た意味と言ふやうなものも少くとも世間が知るで有りませう。」

丸で夢中になつて喜んで居る。山科君は寧ろ不思議に思つて居る。斯んなほんの数へる程しか讀む人の無い本を拵へて、これほどまでに喜べるものかと思つて、ないない一人で驚いて居る。結局、やはり先生は日本の學者なんぞとは大分違つた人間だと考へた。

「それから、あの露西亞語の文典の方も、もう迹は大抵あなたに出来ませう。私はもうこれでいつ死んでも差支ないと言ふやうなもので有ります。」

全く他愛の無いほど有頂天になつて居る。當分の間は、いつ行つて見ても、いつも寢臺の上へそれを置いて、ときどき明けて見ても一人で笑壺に入つて居た。

一日、山科君は學校で學長に逢つた。

「やあ。福井君も大分好くなつたね。僕も昨日久し振りに病院へ行つて見た。醫者も不思議に言つて居る。どうも子供の時から肉食をして居るから、それであんなに持つのに違ひないと言つて居た。いつも普通の日本人ばかり診て居るものにはさつぱり見當がつかないさうだ。ことに依ると、また、好くなるかもわかからない。本が出来たので、非常に喜んで居た。生きて居る中に出来るかどうかと心配したが、好かつたね。あれを婆さんに見せただつてね。そしたら、婆さんわしにはさつぱり分らんとか何とか言つて丸で取り合はなかつたさうだ。ひどくそれを憤つて居たつけ。それは婆さんに見せたつて無理さ。だが、婆さんも婆さんだよ。嘘にもそれは好かつたとか何とか喜ばして置けば好いのだ。」

それから先生の病氣はだんだん好くなつた。知つて居る者はみな不思議に言つて居る。唯だ、モルヒネの中毒だけはますますひどくなつて、日に日に注射の分量も度数も殖えて行つたが、その外には熱も次第に下つて来るし、食欲もだんだん増して來た。

その頃、先生は變なものがひどく好きになつた。それはゲッツベストの桃の罐詰である。どうも食べたくて食べたくて溜まらなくなるらしい。



「菊枝さん。また無くなりましたな。今度街へ行つたら、どうか買つて来て下さい。」  
丸で子供がおやつをねだるやうな具合である。

「まただつか。直つきに無うなりません。」  
菊枝さんも笑つて居る。

それまで山科君は花を持つて行つたり菓子を持つて行つたりして居たが、それから此の  
鐘詰を持つて行く事に極めて了つた。

薄黄色の細かく切つた桃の片を汁と一緒に皿に載せて、匙でしゃくうて、つるつると口に  
入れる。そして、いかにも旨さうに舌鼓を打つて居る。

「もう少し下さい。もう極く少しで宜しい。」  
丸で赤見のやうに他愛が無い。

「私は、もし許せば、一罐でも食べて了ひますな。」  
ハンケチで頻りに口のあたりを拭いて居る。

「もし私に金が有りましたら、こればかり食べて居るで有りませう。元來、此の肺病と言

ふ病氣は金さへ有れば決して死なない病氣で有ります。温かい所へ行つて、旨いものを食  
べて、少しも頭を使はずに、丸で莫迦になつて暮らして居れば、大抵癒るに極つて居ると  
言ふのですな。」

四十五。

ある日、行つて見ると、珍しく菊枝さんの姿が見えない。

「菊枝さんですか。菊枝さんは今日は診察を受けに行きました。」

ことに依つたら、とうとう菊枝さんにうつたのぢや無いかと思つて、山科君は少し驚い  
た。

「菊枝さんどこか悪いのですか。」

「ええ。どこと言つて、非常に澤山悪いのでせう。子宮も悪ければ、微毒も悪いし、それ  
から肺も悪いと言ふのですな。もうみんな殆ど持病のやうになつて居るのでせう。」

山科君は愕いた。

「へえ。肺も悪いのですか。」

「もうずつと前からでせう。初めて診察を受けた時に、醫者が私の肺病は菊枝さんのがつつたのだらうと言つた位で有りますから。」

山科君はおやおやと思つた。何だ。さうなのか。菊枝さんの方が先に肺病だつたのか。それでは肺病を怖がらないわけである。人にうつす氣遣こそあれ、自分にうつる氣遣は無い。どうも能くあんな平氣な様子で居られるものだと思つて居たが、今やつと分かつて了つた。さうか。なる程、肺病に近づくには自分が肺病になつて居るほど安全なことは無い。

山科君は思はず長夜の夢の覺めたやうな氣持がした。そして何だかひどく滑稽な氣持になつて來た。これまで病院へ來て菊枝さんの様子を見る度に、どうも自分が非常に不道德な人間のやうな氣持がして、いつも心に咎めて居たものだが、今から思ふと、何だかひどく莫迦莫迦しい。

とうとう山科君は一人くすくす笑ひ出した。何だか一度に肩の重荷が降りたやうな氣持が

する。そして大いに愉快になつた。

## 四十六。

いつか病院の中にも紅梅が咲いて、少しづつ世の中が春らしくなつて來た。冬の間は小舎の奥の方へすつ込んだきり一切姿を見せなかつた鷺鳥がまた俄かに外へ出て來て、があがあ喧ましく餌を探して居る。

所が、例の感冒はいつまで立つても一向下火になる様子が無い。やつぱりまだ、昨日は幾人死んだ、今日は何十人死んだと、どこへ行つても其の話して持ち切つて居る。

とうとう肝腎の菊枝さんが倒れて了つた。

一日、山科君が行つて見ると、もう菊枝さんは先生の居間に居なかつた。

「昨夜はどうも實に閉口いたしました。菊枝さんが一晩中唸るのですな。少しも眠ることが出来ません。」

山科君の顔を見るなり、先生は頻りにぶりぶり言つて居る。

「夕方から急に熱が出たので有りませんが、それから朝まで丸で暇なしと言ふほど唸るのですな。しかも、それが非常に大きな聲で有ります。それで、私が言ふのですな。どうか呻くのはおやめなさい。あなたが幾ら呻いても、決してそれはあなたの熱の下ることとは關係しません。さうしますと、菊枝さんは私が不深切で有ると言つて非常に憤るのですな。」  
菊枝さんは、今朝早く入院の手續を済まして、もう普通室の方へ行つて居るのださうである。

山科君は早速その方へ行つて見た。なる程、菊枝さんは頭へ氷嚢を載せたまままだ頻りに唸り續けて居る。

「山科はんだつか。わたいなあ。山科はん。もう死にまんのや。」

山科君は愕いた。丸で蚊の泣くやうな哀れつほい聲をやつと出して居る。何だかいつもお母さんと喧嘩をする勇敢な菊枝さんとは丸で別人のやうな氣持がする。

「先生たらそれはほんまに勞<sup>た</sup>はりがおまへんさかいな。こないだ中からわたい具合が悪あ

したんだつけどな。やつぱり夜なかに二度も三度も起きんなりまへんやろ。そひて、とうとうこないになつたら、先生て、唯だ好え氣味やちうてはるのだつしやる。」

やはりやつと聞き取れるやうな微かな聲を出して、頻りに先生の讒訴をやつて居る。まさか先生も好い氣味だと言ひはしなかつたらうと思つて、了ひに山科君も少しをかしくなつて來た。丸で子供の喧嘩のやうに兩方で頻りに告口をし合つて居る。

それから先生の部屋へ歸つて見ると、丁度先生は激しく咳き入つて居る最中である。

「山科さん。濟みませんが、直ぐ看護婦を呼んで來て下さい。大急ぎで呼んで來て下さい。直ぐ注射をして呉れろと言つて。」

顔を眞つ赤にして、背に波を打たして居る。山科君はあたふた部屋を飛び出した。

それから山科君は外へ出て、付き添ひか看護婦は無いかと思つて捜し出した。半日捜し歩いて、山科君はまたほんやり病院へ歸つて來た。何だか市中が流感の患者で一杯になつて居るやうな氣持がする。看護婦なんぞ一月前から申し込んで置いてても到底手に入らないのださ

うである。山科君は了ひに少しくたびれた。これは一體どうなる事だらうと思つて、何だか氣抜けがしたやうにほんやり病舎の入口に立つて居た。

「山科さん。付き添ひは有りましたか。」

ふと誰かうしろから聲を掛ける者がある。見ると、いつか顔なじみになつた例の向ひの病室の看護婦である。今日一人退院する患者が有つて、其の付き添ひが、もうよそへ行く約束にはなつて居るのだが、十日ぐらゐの間なら來て呉れても好いと言ふのださうである。

山科君は思はずほつとした。そして、やつと助かつたと思つた。

「さうですか。それは非常に有り難うございました。もし、あなたが居て下さらなかつたら、私は一體どうなつたかと言ふやうなもので有ります。」

道に先生も氣になつて居たものと見えて、心の底から喜んで居る。

扱て、いよいよ來て呉れた付き添ひを見ると、變にうそ穢ない中婆さんである。何しろ先生の用事と言ふのは、麴包を焼いたり香茶を入れたり、ほかの普通の患者とは丸きり違ふの

で、來る早早すつかり面食つて居る。それに、先生の言葉と言ふのがこれが又まだ聞き慣れない者が聞くとさつぱり分からぬ節が多いので、元來氣の利かなさうな婆さん尙のことまごつて居る。

「どうもああ言ふ人達のことと言ふものは私には丸で分かりません。」

夕方、婆さんが食器を洗ひに行つて居るひまに早速先生がやり出した。

「丸で考へと言ふものを持たないらしく見えますな。私がここからちやんと差圖を致しますのです。麴包を切つて火の上にお載せなさい。もう焼けたらしいから、裏へお返しなさい。そしてバタをお付けなさい。今度は少し傍へ寄せて乾かしなさい。その通りにさへしたら實に立派に出來ますでせう。この位容易なことは有りません。間違はうと思つても決して間違ふことが出來ません。それに決して私の言ふ通りにしないのですな。何だか唯だ怖ろしがつて、どうも私はまだ慣れませんからと唯だそればかり言つて居るのですな。慣れなくとも何でも好いから、唯だ私の言ふ通りにして御覽なさいと言ふと、尙ほ怖ろしがつて出來なくなるのですな。私は非常に不思議だと思つて居ります。」

とにかく、菊枝さんが居なくなつて、早速非常に不便を感じて来た。

「菊枝さんと言ふ人は實にひどい人で有ります。私は非常に驚きました。」

翌朝、山科君の顔を見るなり先生が始めた。

「菊枝さんは今朝早く神戸へ歸つたと言ふのですな。妹が迎ひに来たのださうで有りますが、それに私の所へは丸で何とも言つて来ません。私は今あの婆さんに聞いて初めて知りました。さう言ふ人で有ります。」

しかし、何にしても菊枝さんが居なくなつて俄かに不便になつたのは争へない。山科君までが何かにつけてひどく不自由な思ひをする事が多くなつた。併し、先生はさう言ふけぶりも現さない。いつでも菊枝さんの話が出る度に、口を極めて悪く言つて、歸つて呉れて大いに清清しましたと言ふやうな顔をして居る。随分依怙地な先生も有るものだと思つて、山科君は驚いて居る。お母さんはお母さんでまた、菊枝さんの代りに己むを得ず自分で食事を待つて来て、

「なあ。山科さん。あんなひどい女子は二人と有りはしませんばい。わしの事を口穢なり

言ひさへしたら好えと思つてますのぢやがな。なあ、もし。丸で氣違ひですばい。」

日頃手ひどくやつつけられた怨みを一度に晴らす氣で、こころと悪口をついて居る。

## 四十七。

「山科さん。濟みませんが、あなたから一つ菊枝さんに手紙を出して頂くことは出来ませんか。病氣はその後どうかと言ふことを聞きまして、もし好くなつたら出来るだけ早く歸つて呉れないかと言つてやつて頂けませんか。」

一日、先生が澄ましてさう言つた。山科君は思はずをかしくなつた。そして、とうとう先生もへこたれたなと思つた。

菊枝さんからは直ぐに返事が来た。それは、妹かなんぞが代筆をしたらしい手紙で有つたが、寸寧に見舞ひの禮を言つて、私はどうもまだ熱が下らないで寝て居りますと書いて有つた。山科君は事に依ると菊枝さんはもう来るのが厭やになつたのでは無いかと考へた。

近頃、山科君は毎日チエエホフを持つて病院へ行く。先生がチエエホフを読みたいと言ひ出したので有るが、何しろ毎日兩手へ注射をするので、もう本を持つて居ることも出来ないのださうである。そこで、山科君が毎日日本を持つて行つては、讀んで聞かせて、そして、かたがた發音を直して貰つて居る。

「山科さん。實に變なことが起こりました。」

ある日、先生がをかしな顔をして言ひ出した。

「私の心臓は右側に有ると言ふのですな。」

山科君も驚いた。そんな話しはまだこれまで聞いた事が無い。

「それがどうも面白いのですな。部長も醫者も今日までは丸で氣がつかずに居たので有りますな。それに、今まで毎日診察して、あなたは心臓が好いからとか何とか言つて居たので有りますからな。」

山科君もすつかり面白くなつて了つた。博士だの何だのと言つて、随分好い加減のものだと思つて、何だかひどく痛快になつた。

「一體そんな事が有ることなのでせうか。」

「滅多に無いさうです。一萬人に一人有るか無いか位で、非常に珍らしいと申して居りました。はじめは、今ほどは右に無かつたらしいのですが、右の肺がいけなくなるにつれまして、次第に押されて今の所へ來たらしく見えますな。今日初めて部長が氣がついたので有りますが、今まで毎日聴診器で何を聞いて居たかと言ふやうなものです。」

とうとう二人とも大きな聲を出して笑ひ出した。一體この先生はどこまで變つて居るのだらうと思つて、山科君はまじまじ先生の嬉しさうな顔を眺めて居る。

「ああ。さうで有りまじた。さき程菊枝さんの家から手紙が参りまじたが、菊枝さんは氣が違つたと言ふのですな。」

山科君はまた愕いた。

「何でも二三日前から變なことばかり言つて居るさうで有ります。熱の爲だと家からは行つて來て居りませけれども、熱は三十八度ぐらゐると言ひますから、その位の熱でそんな事になる氣遣は有りませぬ。多分前から微毒か何ぞに腦をやられて居たので有りませう。」

四十八。

それから二三日すると、付き添ひの婆さんが突然黙つて行つて了つた。ちよつと着物を取り替へて来るとか何とか言つて、風呂敷包みを持つて出たつきり、いつまで立つても歸つて来なかつた。

二人ともまたすつかり參つて了つた。早速また向ひの看護婦に相談して見たけれども、さうさういつも都合よく行く筈が無い。何しろ早速今日のことには差し支へるので、いろいろ先生と相談して見たけれども、結局お母さんに來て貰ふより外に爲方が無いので、早速山科君が電話をかけたに行つた。

所が、何が何でも斯う言ふ場合で有るから、幾らあのお母さんでも早速來て呉れるだらうと思つたら、それが大きに當てが外れた。お母さんは、用事の都合が何だとか斯だとか言つて、なかなかおいそれと來て呉れない。泣くやうに頼んで、やつと用事の済み次第來て貰ふ

と言ふことにして、お母さんもしぶしぶ承知した。随分變なことになるものだと思つて、遠の山科君も一人電話口で憫れて居る。

注射の看護婦を呼びに行つたり、煖爐の世話を焼いたりして居る中に、とうとう夕飯の時刻が來て了つた。しかし、お母さんは一向來て呉れない。己むを得ず山科君がおさんどんをして、食事を拵へた。洋服を着た大男の山科君がしがんで七厘を煽いで居る圖は頗る珍妙を極めて居る。

「斯う言ふお世話まであなたにして頂かうとは思ひかけませんでした。私は一生の間有り難がります。」

先生は何だか少し涙ぐんで居る様子である。

「しかし、どうも學問の力と言ふものはひどいもので有りますな。」

「あの婆さんは了ひまで私の思ふ通りに麴包を焼いて呉れませんでした。一度もこれほど上手に焼くことが出来ませんでした。つまりそれが頭の有ると無いとで有りますな。學問

の力と言ふものはさう言ふ所でも違ふのですな。いや。實際感心いたしました。」  
山科君は却つて痛み入つて居る。

お母さんが來たのは、もうとつぷり暮れた後であつた。さて、來て呉れたのは好かつたが、お母さんは今夜は泊ることが出来ないと言ひ出した。二人とも復たすつかり當惑した。内の方へは人を頼むとか何とかして、是非今夜は居て下さいと先生が頼んで居る。それでもお母さんは今夜はどうしても駄目だと頻りに押し問答をやつて居る。

「私は百圓拂ひます。一晚の爲に私は百圓出しますから、内へは誰か備ふことにして下さい。」

とうとう先生が憤慨して了つた。

「それなら出来ないことは無いでせう。それでも、あなたが泊れないと言ふことは無いでせう。私が今どれだけ困つて居るかと言ふ事はあなたにも分かつて居るでせう。私は百圓でも二百圓でも拂ひます。あなたのいると言ふだけ出します。」

先生は眞つ赤になつて憤つて居る。しかしそれでもまだお母さんは決して泊らうと言はな

い。やはり唯だにやにや笑つて居るだけである。

「しかし、注射や何かがありますから、先生お一人いらつしやるわけには参りますまいから、もしどうしても御都合が悪いやうでしたら、今夜は私が泊ることに致しませう。」

「お母さん。まあ、考へて御覽なさい。私の便器の用事や何か一體誰が致しますか。あなたはそんな事まで山科さんに頼めると思ひますか。」

先生は丸でもう喧嘩である。

とうとう了ひに迫のお母さんもへこたれて、それでは今夜は泊ることにしようと言つた。

二人とも思はずほつとした。しかし、用事の都合があるから、も一度歸つて出直して來ると言つて、お母さんはまた歸つて行つた。

二人とも急に何だかひどく氣持が寛いだ。

外はもう春の夜である。暖爐が消えても、格別寒いとは思はない。一ひら二ひら咲き初めた早咲きの彼岸櫻が闇のなかにほの白い。病院のなかは唯だしんとして物のけはひもしない。



山科君はまたチエエホフを取り上げた。

「その時やつと彼に分かつて来た。人世には目的なんと言ふものは無い。高遠な理想なんと言ふものも無い。總ての事柄に意味は無い。要するに、この大世は唯だ二つの幻影に過ぎない。この世のなかには、一人として正しいものも無ければ、また正しくないものも無い。總ては唯だ冷たい已むを得ざる事實である。サガレンの島に流されて一生を送る囚人の生涯と、ニッツアの保養地で裕かに暮らす人達の一生と、その間の相違は殆ど知る事が出来ない位に微かである。カントの脳味噌と蠅の脳味噌との區別は殆ど知れない程に僅かである。」

主人公がこんな事を考へる一節がある。

それからお母さんが来るまで、二人は久し振りに二人きりで染み染み話したやうな氣持になつた。

お母さんが来たのはもう十二時近くである。やつと山科君も歸れることになつた。一人外へ出て見ると、病院の夜は眠つて、なま温かいやうな、また少し冷いやりするやうな、變に

艶めかしい風がそよそよ地面を撫でて居る。

四十九。

山科君はまた足を棒にして付き添ひか看護婦は無いかと捜し出した。しかし、どうせ斯う言ふ際に餘つて居るわけは無いので、何かのはづみに旨く零れたのが有つたら拾つて来ようと言ふ虫の好い考へで、せつせと捜し歩いたが、やつぱりそんな旨い口はどこにも落ちて居なかつた。

その間、とにかくお母さんが通つて来て呉れて居たが、やはり何とか言つては来るはずの時間に来なかつたり、來ても直ぐ歸つたりして、どうも不便なことが多かつた。すると、見るに見兼ねたのか、例のむかひの看護婦が自分の方の隙を見ては氣をつけて世話をして呉れる。全く二人ともそれが爲に非常に助かつた。これは山科君には非常に意外である。これまで女の中でも凡そ看護婦ほど厭やなものは無いと思つて居たのがまた少し變つて來た。

それから五日ほどして、先生はまた突然咯血した。

病院から知らせが来て、山科君が愕いて飛んで行つて見ると、先生はやはりまた眞つ蒼な顔になつて倒れて居る。一晚の中にけつそり頬の肉が落ちて居る。

山科君はてつきり此の間うちのごたごたが病氣にこたへたのに相違ないと思つたら、案外それはさうで無かつた。

「私の受け持ちの醫者と云ふのは實にひどい不深切な人間で有ります。」

先生はやつと細く眼を明けて、極く小さな聲で話し出した。

「もうずつと前からどうも容態が好くなかつたのですな。痰を見ましてもいつも少しづつ色が附いて居りますし、それからいつも此の胸の奥から何か熱いものが上つて来るやうな氣持が致します。何もかも總て前に咯血した時と同じ事なのですな。それで、私は何度も醫者に注意を致しました。そして、どうか其の手當をして呉れると頼みました。すると、醫者は診察して見まじて、少しもそんな兆候は無いと言ふのですな。しかし、私はどうも

さう考へることが出来ませんから、尙ほ幾度も押しかへして頼んで見まじた。さうしますと、了ひに醫者は少し憤りまして、我我は専門家で有るから、病氣の事は患者よりも遙かに好く知つて居るし、それに我我は責任を持つて患者を診て居るのだと斯う言ひますのですな。さう言はれますと、もう何にも言ふことが出来ませんでせう。それではもう爲方が無いと言ふやうなもので、私も諦めて居りました。そしたら、昨夜突然咯血しましたでせう。すると、直ぐにやつて参りまじて、やつぱりあなたの言つた通りでしたなあ、とうとう咯血しましたなあ、平氣でさう言つて居るのですな。私は非常に腹立ちました。あなたが責任を持つと言ふのはどう言ふことで有りますかと、餘程さう聞いて見ようかと思ひまじた。」

幸ひに、丁度そのとき向ひの患者が退院して。例の看護婦の手が明いた。そこで、二人とも大いに喜んで、早速こつちへ来て貰ふことにした。

翌日、山科君がサイネリヤの鉢をぶら下げて行つて見ると、もうちやんと白服を着た看護婦が隅に控へて居た。

「どうもやはり何と無く愉快な氣持が致しますな。付き添ひと言ふものは、どう言ふわけ  
 で有りますか、非常に穢ない感じのするもので有りますな。それに、何でもきちんきちん  
 と片づいて行くのが非常に愉快で有ります。」  
 久しいこと欲しがつて居た看護婦がとうとう手に這入つて、先生はすつかり悦に入つて居  
 る。

今日も春らしい好い天氣で、看護婦が窓の所へ持つて行つたサイネリヤの鉢に一杯朝日が  
 差して居る。先生も今日は機嫌の好い顔をして、頻りにそれを眺めて居る。サイネリヤは花  
 よりも葉の方が美しい。殊に、葉の裏に丁度紫に似た美しい陰影がある。

「これを露西亞語で何と申しますか。御存じで有りますか。」

「いえ。存じません。」

「アツチエエナク。」

先生ははつきり發音した。

「好く女の首巻などに使ひますな。例へば、この天鷲絨は赤で有るけれども緑のアツチエ

エナクを持つて居ると言ふ風に使ふのですな。」

その晩、遅くお母さんが山科君の家を訪ねて來た。

「山科さん。一體福井はいつまでああして居りますのぢやらうかなもし。」  
 來るなりお母さんが言ひ出した。

「もう、あんた。半年の上になりますがな。初めに學長先生もほんの二月か三月のことぢ  
 や言ひますけに、私も食事やら何やら世話をすることにしましたのぢやがな。それが、あ  
 んた、此の上まだいつまで斯うして行かんやら分かりやしませんばい。なあ。山科  
 さん。私やほんまに困つて居りまつせ。その上、あんた、今日行て見ますと、看護婦さん  
 が來てますのぢやがな。私や悔くりしましてなあ。これは一體、どうした事かと言ひます  
 と、福井は唯だ私が備ひましたのですとさう言ひますのぢやらうがな。そこで、私もさう  
 言ひましたぢや。お前は金も無かばつてん、さうして丁ひに、どうする氣かとな。そひた  
 ら、福井は返事もしはしませんばい。なあ。山科さん。どうぞあんたからも好う話して見

てお呉れやすな。了ひに困るものはほんまに私だけでござすばつてん。」  
初めは黙つて唯だふんふん聞いて居た山科君も了ひに少し厭やな氣持になつて來た。

## 五十。

翌朝早く、山科君は病院からの使ひで起こされた。今先生が死んだと言ふのである。

山科君は唯だほんやりして了つた。何だか嘘のやうな氣持がする。あわてて仕度をして外へ出た。

外はまだ薄暗い。いま夜の明けた所である。街の上は唯だしんとして、人の影もない。山科君はまだ夢を見て居るやうな氣持である。

病室には看護婦が一人つくねんと待つて居た。死骸には顔の上に何か白いきれが懸けてある。這入つて行くなり、枕もとのコップに一杯咯血した血の溜まつて居るのを見て、山科君は思はずぞつとした。

「とうとうお亡くなりになりました。全く急なことでございました。」

看護婦は丁寧に山科君に悔みを言つた。

「今朝ほど突然咯血なすつたのでございますが、其の血を吐いて了へば宜しかつたのださうでございます。まだ此の位の咯血でお隠れになるやうな事は無かつたのださうですが、先生は血を吐くまいとなされたのでございますね。それで、その血が喉へ詰まりまして、とうとうね。」

なる程、先生は常から何よりも咯血を怖れて居た。

「何しろまだ参りましたばかりで、一向に馴れませんものですから、すつかりまごつて了ひまして。」

山科君は頗る變な氣持である。悲しい氣持などは少しもない。唯だ何だか部屋のなか冷たくて爲方の無い氣持がする。思はず身震ひをする程である。そして、何でも好いから唯だ一刻も早く病室から出たかつた。

とにかく電話をかけなくてはならない。第一にお母さん呼び出した。死んだと言つては

幾ら何でも愕くだらうと思つて、

「いま先生が急にお悪くなられましたから、直ぐ来て下さい。餘程お悪い様子ですから。道のお母さんもひどく愕いて、電話口であたふたして居る様子である。」

それから、學長と圖書館長と神田さんとへ電話をかけたら、みな直ぐ行くと言ふ返事で有る。それから、外へ出て、菊枝さんの所へ電報を打つた。その外はどこへ知らして好いか分からぬ。

幾らあのお母さんでも突然死んだ所へ飛び込んで愕くだらうと思つて、山科君が病院の門で待つて居た。

「さうですか。まあな。とうとう死にましたか。」

思つた程にお母さんは愕かない。しかし、何だかひどくあわてて居る。

「とうとうな。死にましたのかな。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

お母さんは急ぎ足に例の豚小舎の横を通りながら頻りにお念佛を稱へて居る。

「本當になあ。あんたさんにえらいお世話になりましたばい。福井もなあ、それは喜んで

居りましたぞな。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

すると、今度は突然、

「あいな。山科さん。福井は寢臺を持つて居りましたなあ。露西亞から持つて歸つたあの畳み折りの寢臺がござりましたなあ。れはどうになりましたのぢやらうか。あれもやつぱりあの時賣りましたのかなあもし。」

相變らずのお母さんと追に山科君も愕れて居る。もう遺産のことを言ひ出した。

「どうぞなあ。葬式のことを願ひ致しますわい。お金がいましたら、私が出しますけん。何もかもあんたさんにお願ひ致しますわい。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

やつぱりお母さんはすつかり轉倒して了つて居るのだなと山科君は考へた。何の話をするのやらさつぱり埒が無い。

病室へ這入ると、お母さんは突然激しく泣き出した。傍へ寄つて、顔の被ひを上げて一目見たかと思ふと、急に溜まらないやうに激しくせき上げた。

「山科さん。私はまあどうなりますのぢやらうなあ。斯うして福井に死なれて、私は一體

「どうなりますのぢやらうな。」

口を引つ釣らして、掴み寄せたやうな顔をして、大きな聲でしゃくり上げた。涙がほとほと床の上に落ちて居る。常から怖ろしく醜い顔が尙ほ一層醜くなつて、何だか子供が赤んべえをしたやうな顔である。

そこへ醫務室から山科君を呼びに来た。用事は死亡届やら火葬場の手續やらである。それには先生の本籍が必要なので、學校へ電話をかけて聞いて見たが、分からない。そこで、また病室へ歸つて来た。

「お婆さん。先生の本籍はどちらでせうか。」

お母さんはまだ同じやうに泣き續けて居る。振り向いた顔を見ると、もう目が眞つ赤になつて居る。

「本籍ちうたら何のこととござすぞな。はあ。戸籍かな。戸籍は、あんたさん、天草富岡でせうがな。」

「ええ。その天草富岡のどこでせう。」

「さあ。私もそれよりは知りませんがな。へえ。もう昔のことですばつてん。」

山科君は、一人當惑して、ほんやり病室の入口で考へて居る。お母さんが知らないやうでは、外に知つて居る人の有るわけが無い。

そこへ圖書館長が例の通り端然として這入つて来た。やはり極端に義理固い人だけに誰よりも先へやつて来た。

お母さんは館長の顔を見るなり、直ぐ板の間へ兩手を突いて平つく張つた。館長は狭つ苦しい部屋の中へ這入つて、丁寧に死體にお時儀をした。お母さんは、館長に悔みを言はれると、大きな口を扭ぢ曲けて、醜怪極まる顔をして、また激しく泣き出した。

館長と一足違ひに學長がやつて来た。

「うん。うん。それはあんたも辛からう。辛からうが、しかしもう死んだものは爲方が無い。斯うなつたものは爲方が無い。」

丸で子供をあやすやうに、學長はお母さんを賺して居る。

間も無く今度は神田さんが来た。そしてさつさと用事を片つけて、復たさつさと歸つて行

つた。好くああ鮮やかに行くものだ、山科君は驚いて居る。本籍の一件もこの人に頼んだら、滞りなく済んで了つた。何でも旨くごまかして了つたらしい。

「山科さん。ここに金入れがありましたがああ。」

やつと用事が片づいて了つて、山科君がまた病室へ行つた時に、頻りに荷物を片づけて居たお母さんが、さう言つて大きな革靴を持ち出して來た。

「あんなさん。これを明けて見てお呉れませんか。」

明けて見たら、中から丁度五百圓金が出て來た。山科君は少し驚いた。これでは先生も餘り貧乏的だとは言へないと思つた。そして、一體どうしてあれほど食へたい桃の罐詰も食へないで斯んな金を溜めて居たのだらうと思議に考へた。遺書らしいものは無いかと思つてそこらを引つ掻き廻して見たけれども、一向それらしいものは見えなかつた。

「これはあんなさんが預つて居てお呉れやすや。」

お母さんは革靴を山科君に渡して了つた。

山科君は外へ出た。

どんより曇つた、厭やにうそ寒い、氣持の悪い天氣である。

やれやれとうとう了ひになつて了つた。もういよいよここへ通つて來ることも無いのだなと思つたが、全體に何だかひどく疲れて居る。何だか頭もからだも丸で空になつて了つたやうな氣持である。

要するに、一人の人間の死ぬと言ふことは小さな事だ。が、同時にまた非常に大變な事柄だと、ほんやりそんな事を考へて病院の門を外へ出た。

五十一。

夕方、山科君はまた病院の門を潜つた。今夜は死體室でお通夜をするのださうである。病室へ行つて見たら、もう何一つ無いやうにすつかり片づけて了つて有つた。これがあの

これまで毎日通つて来た部屋だつたか知らんと思つて、山科君は思はず不思議さうに其のがらんとした部屋を見廻した。

死體はもうすつかり看護婦が迹始末をして死體室へ運んで有つた。しかも、此の看護婦は今夜は一緒にお通夜をして呉れるのださうである。山科君は尙ほのこと驚いた。この看護婦はたつた一日しか先生の用事はしなかつた。それにどうして斯んなに迹まで好く世話を焼いて呉れるのだらうと思つて、これまで看護婦とは冷淡の見本だと思つて居た山科君は何だか少し勝手が違ふやうな氣持になつて居る。

長い廊下が盡きると、庭になつて、立ち樹が一杯茂つて居る。その樹だちの間に、眞つ赤な電燈が一つほつんと何か異常な事の目印のやうにともつて居る。それが死體室の入口である。

土間に二つ寢臺が並べて置いてある。其の一つが先生の死體である。上から紗を被せた頭の所で頻りに香が薫つて居る。

今一つの寢臺には百姓らしい無骨な婆さんの死體が載つて居る。

六疊ばかりの疊を敷いた座が有つて、そこに五六人の女がやはり通夜をして居る。その死體の娘や孫や嫁やで有るらしい。山科君とお母さんと看護婦と、その片隅へ割り込んで座を占めた。

春には珍しく寒い晩である。三人はぐるりと一つの火鉢へかじり附いた。

「南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

お母さんはまだときどき涙ぐんで丸で口癖のやうにお念佛を稱へて居る。

「ほんになあ。これから私はまあどれほど寂しか。まさかこれほど急に死なうとは思ひかけませなんだばつてん。それでもなあ。あれも一人の親ぢやと思つて、それは好う氣をつけて呉れましたばい。それは私には優しうして呉れましたぞな。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。」

山科君は愕いた。幾らちやらつほこでも、これは又餘り激し過ぎると思つて、惘れて了つた。しかし、お母さんはときどき涙を噉つては澄まして球数を爪繰つて居る。

突然、お母さんはちやんと死體の方へ向いて坐り直して、大きな聲でお經を讀み出した。



山科君は何のお経だかさつぱり分からなかつたが、ひよつとしたらこれがいつかの『阿彌陀經』では無からうかと思つて變な氣持がした。しかし、聞いて居ると、お母さんの讀み方は何だか知らぬが流調を極めて居て、ひどく立人じみた感じがする。やつとそれが濟むと、今度は少し斜めになつて、隣りの婆さんの死體の方へ向いて復たお経を讀み出した。お通夜の人達も一齊に向き直つて畏つて聞いて居る。

「お婆さん。有り難うございました。」

迹でみんなが厚く禮を言つて居る。それから、お母さんはその女の人達と親しくたつて、何だか頻りと話して居る。

「それは何よりも信心が第一でございますわい。一心に阿彌陀さまにお縋り申してさへ居たら間違はござりませんばい。さうして、生きとる中に出来るだけの善根を積んで、淨土のお迎への來るのを待つやうにせんなりませんばい。」

ふと聞くと、お母さんが熱心に説教をやつて居る。「ほんまになあ。その通りどすなあ。」

何にも知らない人の好きさうな女達が頻りに相槌を打つて居る。

長い夜である。更けるに随つて、寒さはますますひどくなる。幾ら外套の襟を立てて火鉢をかじり附いて見ても、土地の底から牙え返つて來る底冷えの身に沁みるのを怵へる事が出來ない。

もう誰も口を利くものも無い。あたりはしんとして、唯だときどきお母さんが思ひ出したやうに口の中でお念佛をつぶやくやうに繰り返して居るのが聞こえるだけである。香の烟が二筋眞つ直ぐに立ち上つて居る。窓から覗いて見ると、いつかすつかり雲が散つて、澄み切つた蒼空に星が闌干と懸つて居る。

漸く東の窓がしらしらした。

山科君は思はずほつとして外へ出た。外はまだ寒かつた。一面に霜柱が立つて居る。歩く度に靴の下でがしやがしや大きな音を立てて碎けて居る。今日は好い天氣であるらしい。東の空にもう薄赤いちぎれ雲が浮んで居る。

朝飯を済ますと、山科君は直ぐに學長を訪ねて、昨日の金を渡して來た。學長も驚いて居る。

「さうか。それは驚いたね。これは君、一體どうした金なのかね。」

「さあ。私も好く存じませんが、神戸の家を疊んだ時の賣代やなんぞを残して居られたのでは無いでせうか。」

「さうかね。どうもやつぱり西洋人だなあ。自分の葬式や何ぞの事で人に迷惑をかけてはならないと思つたのに違ひない。随分金に困つて居たことも有つたやうだがね。どうしてもやはり違つた所がある。到底日本人などには無い事だ。」

果して麗かな日になつた。昨日と引き違へて、今日はほかほかと暖かい。

正午に山科君は解剖室の前で待つて居た。そこで死體を受け取つて、神田さんと二人で火葬場まで送つて行くのである。學長と圖書館長とはそこで死體に告別した。お母さんは先へ俥で行つて火葬場で待つて居る。

大學の印判纏を着た駕丁が二人、長い電車道に添つてのろのろと駕籠を擔いで行く。凡そ

これほど淋しい野邊送りと言ふのも滅多に無い。駕籠脇に添つて居る者と言つては洋服を着た大きな男がたつた二人きりである。世の中はもう陽氣な春で、ときどき花見の人と行き違つた。

夕方、家へ歸つて見ると、菊枝さんから手紙が來て居る。

「でんほ有りがたく存候。先生はお死なされたよしお世話が出來ませんなんで残念でたまりません。私は先生は他人のやうな氣がしません。いづれ近いうちに好くなつたら上ります。」

菊枝さんの手で書いてある。手紙を見ると、氣が違つて居るやうでも無い。もう癒つたのかなと山科君は考へた。山科君は直ぐに手紙を書いて野邊送りの模様や金の有つたことなどを知らしてやつた。やつぱり菊枝さんの外には親身に先生の話しの出來る人は無い。

山科君は何だかひどくくたびれて居る。手紙を書いて了ふと、直ぐに床を取つて寢た。しかし、やつぱり變に眼が冴えて了つてどうしても眠れない。灯のつく頃にまた床を離れて、

湯に入つて来た。すると、幾らか気分が好くなつた。しかし、まだ何だか明るいあかりの下が堪へられないやうな氣持がする。そこで、山科君は外へ出た。疎水に添つて闇の中をゆるゆる歩いて行く。ここは誰も通らない。了ひに大きな柳の幹に凭れて、長いこと一人で凝つと黒い深い水の面を眺めて居た。

突然、全く何の動機も無しに、涙が流れ出した。そして、迹から迹から留め度もなしにはふり落ちる。とうとう山科君はハンケチに顔を埋めて咽び泣いた。

泣くだけ泣いて了つたら、何だかひどく嬉しくなつた。何かを洗ひ淨めて了つたやうな、ひどくすがすがしい氣持である。

山科君はまた家の方へ歩き出した。

五十二。

それから三日目に、神戸から突然菊枝さんがやつて来た。

所が、菊枝さんは一人妙な連れを連れて居る。丸髷黒襟の怖ろしく意氣な中年増である。

「山科はん。この人なあ。御存じだつしやろ。あの九一さんの嫁はんだつせ。」

山科君はやつとの事で想ひ出した。九一さんと言ふのは例の神戸で株屋をやつて居ると言ふ先生の親類である。それでは此の人は株屋のお上さんである。意氣なもの無理はない。

「あのなら。山科はん。えらい事だつせ。」

菊枝さんはとつとも無い大きな聲を張り上げた。山科君は膽をつぶして居る。常から菊枝さんの聲は大きな聲だけれども、それが今日はまた特別に度が外れて居る。こないだ中氣が變になつて居たと言ふが、どうもまだ様子が尋常で無い。それに、人の言ふ事なんぞ頭から聞き入れないで、唯だ自分の勝手のことばかり喋つて居る。

「山科はん。えらい騒ぎだつせ。あのなら。先生の嬰兒がおまんのやて。」

菊枝さんは突拍子も無い聲を張り上げた。山科君はその聲にも驚いたが、その事柄には尙のこと驚いた。

「わたいもなあ。昨日初めて聞いたんだつけどなあ。へえ。どうです。先生、あないな怖

い顔をしてはつたかて、なかなか隈に置けまへんで。まへお芳さんて女中はんが居はりましたてな。先生が神戸へ來はつたいつち最初だすて。その人が産みはつたんだすのやて。」  
山科君は唯だ惘れて了つて、ほんやり二人の顔を見較べて居る。  
「あんた、知つてだつか。覺えてはりまつか。わたい寫眞で見たんだつけどな。別嬪だつせ。」

菊枝さんはにやにや氣味の悪い顔をして笑つて居る。

「もと京都から來てはつたんだつけどな。今は大阪の方へ片づいてはりまんのや。」  
九一さんのお上さんが風呂敷づつみを解いて小さな寫眞を取り出した。見ると、まだ生れ

たばかりの子供を抱いた當り前の若い女の顔が寫つて居る。

「あんた知つてだつしやろ。何遍も見はりましたやろがな。」

傍からまた菊枝さんが口を出した。しかし、山科君はどうもはつきり記憶が浮かんで來ない。さう言はれると、見たやうな氣もしたけれども、また見ないやうな氣持もした。

「あんたほんやりしてまん。見てはるに極つてまんがな。」

菊枝さんが一人で齒痒がつて居る。

寫眞の裏を返して見ると、

「福井明子。父福井明一、母山本芳子。」

と並べて書いて、傍に出生の日が記してある。

「はあ。女のお見さんですか。」

「さうだすて。これが九州へ立たはる時に寫した寫眞だすさかい、今年もうあんた三つだつせ。」

何でも横から菊枝さんが取つて了ふ。

「はあ。九州へ行つて居るのですか。」

「さうだすのやて。九一さんのお世話で、天草の先生の御親類の所で育ててまんのやて。」  
天草と聞いて、山科君は思はず思ひ當つた。

「天草は富岡ですか。」

「さうだす。あんた能う知つてだんな。」

天草富岡へは一度誰にも秘密に金を送つて呉れろと先生に頼まれたことが有る。山科君はやつと今その意味が分かつた。

それから二人は、これから學長の所へ行つて話して來るのだと言つて、また寫眞をしまつて出かけて行つた。

一人になつて、山科君は何とも言へない變な氣持である。意外は固より此の上も無く意外である。また、死ぬ早もう斯うしてつつ突き廻されて居る先生のことを思ふと、一體どこまで不運な人だらうと、氣の毒で溜まらない氣持がする。しかし、どうもやつぱり何だか滑稽な氣がして爲方が無い。山科君も一人で何だかにやにや笑つて居る。

夕方、また菊枝さんがやつて來た。しかし、今度はもう一人である。

「どうでした。學長は居ましたか。」

「へえ。お内へ行きましたら、留守だしてな。そいからまた二人で學校へ行きましたんだがな。そひたら丁度館長はんも來てはりましたな。好え具合でした。」

何だか菊枝さんはさつきとは丸で様子が變つて居る。これならいつもの菊枝さんと大して違はない。

「山科はん。何だしたてな。お金がおましたのやてな。」  
と、菊枝さんはまた急に聲を低くして、

「山科はん。何だつせ。九一さんは、あれはお金とりだつせ。あの嬰兒ヤヤコを種にして何ほなと分けて貰はる算段だつせ。」

山科君はまた愕いた。なる程さうかと思つて惘れて居る。

「なあ。先生も悪い人にかからはつたものや。あないな人に嬰兒ヤヤコの世話を頼まはつたのがそもその間違だつせ。なあ。悪い間には唯の一度も見舞ひにも來いへなんだ癖に、死なはるともう直つきにあの通りや。」

「だが、何でせうね。あれは本當は本當なのでせうね。」

聞いて居る中に、山科君は何だかひどく危なつかしい氣持になつた。

「へえ。そら本當だすとも。えら本當だつせ。先生もなあ。ああ見えて仲仲なあ。」

菊枝さんは變ににやにや笑つて居る。

「何ですてなあ。あの病氣はさうだんのやてなあ。初めは誰でもさうだんのやて。あんた知つてだつたか。先生ほかにも女子はんがおましたで。へえ。神戸で。何でもな。西洋人のタイペスイかいな。」

思はず山科君は笑ひ出した。

「タイピストですか。」

「へえ。そひたらな。その人また他に男はんを拵へはりましたのやて。それが、あんた、どうだす。現在、先生が教へてはる生徒はんだんのやて。さあ。先生が憤らはりましてなあ。それからもう寄せつけはらしまへなんだで。そいから、まだ面白あんな。先生學校へ行かはつても、其の生徒はんだんには口も利かはらしまへんのやて。」

無論、いつか山科君がぶざまに欠をして居る所を見つけられたあの女の人に相違ない。山科君はますます意外である。そして、ますます滑稽な氣持になつて來た。

「それからな。山科はん。一つお願がおまんのやがな。わたいまだ給金の残りがその儘に

なつてまんのや。鼻糞ほどだつけどな。わたいからは言ひ悪うおまつさかい。濟みまへんけど、あんたからお母んにさう言うて貰へまへんやろか。さうだつたか。そら大けに。さうだんな。しかし、先生もほんまに氣の毒なお人だしたな。」

やつと菊枝さんが歸り仕度を始めた。

五十三。

「山科君。昨日は妙な者がやつて來た。」

翌日、學長を訪ねたら、早速變な顔をして言ひ出した。

「何しろ、君、二人ともああ言ふ風をして居るだらう。大丸鬚に黒襟なんぞを掛けて、いや、どうも實に驚いた。それが突然教官室へ飛び込んで來たのだから、全く前代未聞だ。それに君、どうもあの女中の方は實に大きな聲でね。あれは君、どうも少し變だよ。」

とうとう山科君も笑ひ出した。

「いや。全く閉口した。事務員なんぞは愕いて爲事をやめてじろじろ見て居る始末でね。丁度館長が來合はして居たのだが、何でも僕が變な女に談判を持ち込まれて弱つて居る所だとみんな思つて居るに相違無いと言つて、二人で大笑ひさ。」

學長も、思ひ出すとをかしいと見えて、例の大きな腹を揺すつて笑つて居る。

「しかし、何しろ事實が事實だからね。とにかく、神田にさう言つて、好く取り訊べて貰ふことにして置いたがね。だが、やはり本當は本當だらうね、どうも。」

すると、突然聲を低くして、  
「だが、好かつたよ。反つてその方が好かつたよ。福井君はあの通りの几帳面な男だつたからね。ねえ。反つてその方が人間らしくて面白いぢや無いか。」

間も無く葬式の日どりが極つた。式はある浄土宗の寺でする事になつた。山科君はいつか先生が佛葬は嫌ひだと言つたのを思ひ出したが、しかし無論何にも言ひはしなかつた。お通

夜の晩にお母さんが、枕もとでお經を上げて了つたから、もうどうせ同じことだと思つて居る。

すると、その時また神戸の菊枝さんから例の給金の催促が來た。山科君は、不思議に思つて、早速お母さんにさう言つた。

「あれはなあ。山科さん。もう遣らんでも好えことになつて居りますのぢやがな。菊枝さんちうたら、それはひどい人どすぜ。菊枝さんにも長かこと世話になつたさかい、福井のあの金の中から五十圓ほど禮をしたらどうかちうて學長先生も言つてお呉れますけん。直きに送りましたのぢやがな。そしたら、まだ受け取つたとも何とも端書一つ來やしませんがな。」

それから四五日置いて、復た菊枝さんから催促の手紙が來た。山科君はどうもをかしいと思つて、神田さんにその話しをして、今度は神田さんからお母さんに話してもらふことにした。

「山科さん。先日の話しですがな。あれはどうも妙な事になつて居るらしい。」

次に神田さんに逢つた時に、神田さんはをかしの顔をして言ひ出した。

「なる程、給金は確かにまだやらなくちやいけないのが有るのだが、婆さんの言ふには、あべこべに菊枝さんの方から貰はなくちやならん事になつて居ると、斯う言ふのですな。」

「私もをかしいと思つてだんだん聞いて見ると、初めは婆さんもなかなか言はなかつた。とうとう了ひに白状したのを聞いて見ると、どうも二人で博打を打つたらしいのだな。それが、婆さんの方が勝つて、反つて差し引き借しになつて居ると斯う言ふのですな。聞いて見ると、どうもしよつちう二人でやつて居たものらしい。」

「これは山科君もすつかり惘れ返つて了つた。」

「あの婆さん、どうも相變らず困つた婆さんでね。例の金の中からせめて百圓ほどでも天草の子供の方へ送ることにしたら好からうと學長からも好く言つて聞かしたのだが、何とか斯とか言つてどうしても送らうとしない。先がどう言ふ暮らしをして居る家だか好く調べた上で無くては送つても爲方が無いとか何とか言つてね。あれで婆さんに取つてもたつ

た一人の孫のわけだがね。見たいとも何とも思ふ氣は無いのですかね。」

一日、山科君はいつからか預かつて居た先生の荷物をそつくりお母さんの所へ運んで行つた。遺のお母さんも今度は受け取らないとは言はなかつた。これでもう葬式さへ済めば、先生の事はすつかり片づいて了ふわけである。

その歸りに、久し振りに街を歩いたら、夜櫻やら都踊りやらで、街は丸で怖ろしいやうな難沓で有つた。山科君は何だかもう長いこと春だの花だのと言ふことを忘れて了つて居たやうな氣持がした。

或る日、學校で學長に出逢つたら、

「やあ。どうです。其の後は。好い時候になりましたなあ。」

例の通り機嫌の好い顔をして行き過ぎた。



發行所

東京  
銀座  
尾張橋  
町區

株式會社  
アールス

電話  
振替  
東京  
二四八八番  
二四八八番

新 書

大正二十五年五月五日  
發行 大正二十五年六月一日



著者 高倉輝

發行者 北原鐵雄  
東京市東區尾張橋町五號

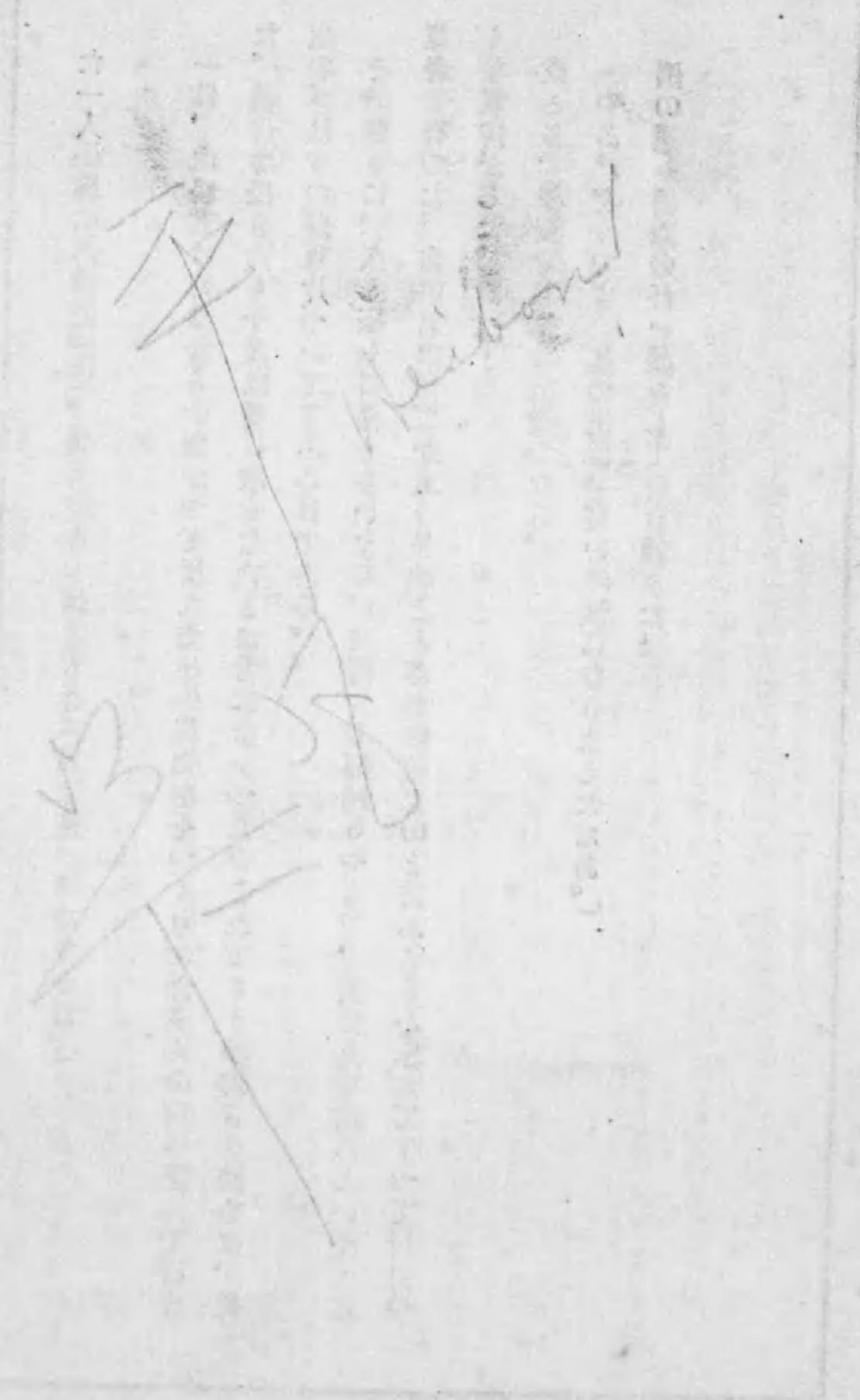
印刷者 山本源太郎  
東京市小石川區久野町四十五番

製本 吉 浩

蒼  
空

定價 壹圓六拾錢

三 十 三



高倉輝氏著

戲曲集 海峽の秋

定價 壹圓貳拾錢  
送料 拾參錢

神を否定し、宗教を否定し、愛、道德、家庭、あらゆる在來の權威を否定する眞の近代人。あらゆる犠牲を踏み躪つて生きろ、闘へ、征服しろと絶叫する徹底せるエゴイスト。遂に寂寞孤獨、生ながらに地獄に沈んでゆく悲痛な近代人の血みどろな姿を描出せる凄慘強烈な一大戯曲を見よ。

悲劇 三人 女人 焚殺

定價 貳圓八拾錢  
送料 拾八錢

著者六年の辛苦になる眞に驚嘆すべき一大戯曲集！「焰まつり」「孔雀城」「切支丹ころび」の三部曲はいづれも永遠につきざる男女両性の闘争と血肉の葛藤の血みどろな姿を描き、人生の寂寥と悲哀が凄慘として眞に迫るものがある。著者の大膽卒直な描寫、その眞剣な態度、雄大な構想、實に現代戯曲界空前の傑作として推賞するを憚らぬものである。

感想集

飯倉だより

…… 島崎藤村氏著 ……

山本 巖氏裝幀・四六判特製箱入美本

金のやうな静けさと光とを持つた藤村氏の感想集である。むつつりと、然し誠實さのこもつた口調で、其の書齋に於ける東西文藝の批評を聞く思ひがする。この一巻を通讀すると、氏の性格、氏の人性觀といふやうなものが、字句の間に一々脈絡を保つて生々として來るのを感じる。「朝を思ひ、又夕を思ふべし」と云つた芭蕉の言葉に思ひ入つた著者が「初恋を思ふべし」と度まく言ひ放つてゐるのも、彼の『新生』を書いた著者が、バスカルの「心胸には道理に知られない道理がある」といふやうな言葉を抄録してゐるのも意味深いことだとの頁を開いて見ても、人間苦に徹した人でなければ現はし得ない言葉——全人格——が嚴肅に迫つて來る。そして其の明澄な文章は、靜かなるものゝ深さ、短かきものゝ鋭さと云ふやうな事が、渺々と味はれる。數行の短い文章にも生命の輝きがある。讀むよりも味はふべき心の糧として江湖に推奨する。

定價 壹圓五拾錢・送料 拾七錢

長編小説

# 結 婚

…… 山崎 斌 氏 著 ……

山本鼎氏装幀・四六判フランス綴美本

純潔にして教養ある新代の一處女の結婚前後に於ける生活、異性に對する悩み、恐れ、憧れ、草葉の如く戦けるデリケートな女性の心理そのまゝを織りなす筆觸を以て描出した稀有の一大雄篇。

彼女が生きて居る中心として書かれてあります。然し私は、そこに彼女の全生涯を通じての悲劇を見る様な心持がしてゐます。それは性格上の破綻か？否々、それは寧ろ社會組織の缺陷にある様に思はれます(著者)

はづ子は清澄な温泉の中に、半ば隠されて、いよ／＼美しい胸とそれを眺めやうとした。この胸に抱かれてゐる健康な美しい胸！それは常に彼女の胸であり、喜びであり、慰めであつた。

この胸、たれに  
あつたか？  
あつたか？

この胸、たれに  
あつたか？  
あつたか？

この胸、たれに  
あつたか？  
あつたか？

## 第二の國木田獨歩が生れた

島崎藤村新著(飯倉だより)より

定價圓貳拾錢・送料三十錢



106
/

終